中央区佃町の集落としての特殊性とその歴史地理学的考察

東村智子

1. 目的

「佃」という町は東京湾の埋立地の一隅にあり，経済の中心地ともいえる中央区に属している．町内では，地域により，大工場がたちならび，都市化がすすみつつあるところと，都会の喧噪とはほど遠く，「ムラ」のような性格をもつところがある．これは集落の発生や歴史の違いが主な要因と考えられる．本論では，その歴史が現在に与えた影響を考えるとともに，地理的に現在の佃町の特色を表わし，また町内での地域的差異についてしめすことを目的とした．

2. 結論

佃町は現在1丁目，2丁目，3丁目から成っている．佃1丁目は江戸時代には「佃島」という島であり，徳川家康との縁で関西から移住してきた漁師らが住み，幕府の庇護のもとに，漁師町として発展した．しかし，明治になり，資本主義の進展などさまざまのことから漁業は徐々に衰退していく．明治半ばには産業化の波にのり，月島とともに新佃島（佃2丁目，3丁目）が埋め立てられ，以後2丁目には石川島播磨重工などの大工場や倉庫がたちならび，工業化がすすんでいく．

佃1丁目では昭和26年に漁業権を放棄した後，築地の魚市場（もとは佃島の漁師が創始）につとめる人が多く，ひとつの特色となっている．また町内で比較すると，老人の居住する比率が高いという結果が得られ，1丁目には神社，つり舟，佃煮屋の老舗など昔の情緒も数多く残っている．また旧佃島ということもあり，関東の中の関西人という経歴をもつことなどから，神社を中心とする地縁的結びつきが強いようである．

佃2丁目は町内で最も面積が広く，都市化，工業化が比較的すすんでいる．2丁目住民の職業も工場関係やサービス業が多く，年齢別人口では25～30才代がとびぬけて高くなり，若い世代が多数を占める．町内には活気があり，店の数や種類もいくらか増える．しかし，住民の結びつきは弱いようである．

佃3丁目の住民の職業は，魚市場や工場などさまざまで，はっきりした傾向は見られない．静かな住宅街で，老人の居住する比率は高く，1丁目とは別の意味で住みやすい雰囲気を持つようだが，やはり近隣のつきあいはうすい．

町全体を通じて店の種類や数を調査してみると，都心部に位置する町としては，かなりおくれている．これは，江戸時代は佃島，明治以後も埋立地という地形のため，長く船の交通により陸とのゆききが行われており，その間は振売商人が活躍したこともあって，地つきの商業がなかなか発展しなかったためである．しかし，佃1丁目では10年以上前の調査とほとんど同じ結果が出ており，これは住民の意識にも関係しているようだ．

また，古い木造家屋が広く分布しているが，1丁目では明治時代，2丁目や3丁目では大正時代と，年代が分けられる．この差異は，関東大震災や戦災の直接的被害の有無によるが，聞きとり調査により，自分の持ち家か否かということも大きな要因ということがわかった．

このように同じ町内でも，丁別にそれぞれ異なった様相をしめしており，さらに家屋の年代，人口構成，就業状態，地縁的結びつきなど，多くの点で町内を区分することができる．そして，町全体の大きな特徴は，至るところで，「新」と「旧」の相反する形態が同時に存在していることではないかと考えている．